

月の花挽歌 ～12. 末摘花～

12.末摘花

12- 1

16歳になった真紀は、山形市にある県下偏差値トップの山形東高等学校に進学した。西川町から山形市まで高速バスを使えば1時間で行ける距離間だったが、運行本数や時刻の制約に加えて、通学定期券を利用しても往復となると、月に数万円の負担になってしまう。

電車通学をしても乗り継ぎ等も含めて片道3時間近くかかる。

真紀は山形市内で『バー末摘花』を営んでいる伯母の持ち家に居候することになった。

志望校の選択肢については、親元を離れることも含めて2年前に義母になった朝子への気遣いもあったが、真紀には何よりもまず、学習環境を変えてアメリカ文学の勉強に取り組みたいと思う向学心が第一義にあった。

山形東高のあるエリアには山形工高、山形北高、山形大学小白川キャンパスがあり、県立図書館もすぐ近くにあった。

『バー末摘花』は、かつて山形を代表する和紙の里だった山形市の双月町で10年余りオーセンティックバーとして営業を続けていた。

山形市の盛り場は駅前と7日町の2つの区域に分けられていて、市役所に近い七日町には通好みや、敷居の高い店が多かった。

古民家をリノベーションした伯母の店は、山形駅から北西に2キロほどに架かる馬見ヶ崎橋を渡って300メートルばかり行った住宅街の中にあった。

雑木に囲まれたアプローチをぬけると、店の入り口に韓紅色の紅花染めの綿布に横書きでバー末摘花と白抜きされた暖簾が掛かっていた。

亡くなった母の姉にあたる松島彩は、独り身の40半ばの色白美人で、実年齢より若く見えた。

二人姉妹だったせいで、夭折した両親の実家に戻った松島彩が、お洒落な今時のバーに改修した訳を、実妹さえも知らなかった。

紅花紬の着物姿でシェーカーを振る彩の美しい身のこなしは、多くの上質な常連客を掴んだ。

噂を耳にした七日町でオーセンティックバーを長年営んできたマスターが注文したウオッカ・ギムレットの出来栄えに舌を巻いたと言う話から、シングルモルトにうるさいドクターがバックバーに並んでいる銘柄のラインアップに思わず唸ったと言う話まで、『バー末摘花』に纏わる世評は謎めいていて、美貌の女性バーテンダーを絡めて枚挙にいとまがなかった。

月の花挽歌 ～12. 末摘花～

12-2

伯母の家から山形東高等学校までの道程は800㍓くらいだったので、通学には申し分なかった。

防音処理されたバーと住居スペースは程よく区切られており、真紀が使用する洋風に改装された10㎡ほどのプライバシーが保たれてる部屋など、そのどの一つをとっても、再生された古民家は隅々にまで伯母らしさが息づいていた。

伯母の彩は姪っ子の真紀に対して、程好い距離間で接してくれた。

一人分作るのも二人分作るのも同じだからと朝食と夕食は彩が用意してくれたが、昼食は高校の中にある食堂の日替わり定食で済ませた。

真紀が高校や環境にも慣れて夏休みに入った紅花の盛りも終わりのある日、彩と昼食を『バー末摘花』の古材チークの一枚板でできたカウンターで取るようになった。

庭で折ってきた丸型で鮮紅色の柘榴の花が一枝シャト・ーラトゥール1952の空き瓶に無造作に生けてある。

ガラス器にトマトジュース仕立てのめんつゆを絡めたそーめんに焦がしたネギをトッピングして盛り付けた涼しげなランチを食べながら、彩と真紀はアブラゼミの声を聞いていた。

「(閑さや岩にしみ入る蟬の声)のセミ論争は知っているでしょう」と彩は唐突に尋ねた。

「斎藤茂吉のアブラゼミと東北大学小宮教授のニイニイゼミ、昭和の初めの話ですね」と真紀は臆せず正確に答えた。

「山形県生まれの茂吉としては、敗北宣言は辛かったでしょうね？」

「伯母さんは、紅花染めが好きなんですね」

真紀は話題を逸らすかのように言った。

一斉にセミの鳴声が止んだ気がした彩は、額に薄っすらと汗を浮かべて姪っ子の横顔をうかがいながら、「そうね。郷土愛も強いし……」とぞんざいに言いかけて、「紅花染めはデリケートで、汗や紫外線に弱いから、外出着には向いていないの。店の暖簾は仕方なしに化学染料を使用しているのよ。本来は鮮やかなピンク色で、艶やかさを秘めているのだけどね。近くに懇意にしている草木染工房があるから、今度、案内するわ」と伯母の立ち位置を意識して言った。

「よろしくお願ひします。ところで話は変わりますが、伯母さんは『源氏物語』の末摘花の巻をご存知ですか？」と真紀は空き瓶に生けられた柘榴の花を見ながら彩の心に揺さぶりをかけた。

月の花挽歌 ～12. 末摘花～

12-3

馴染みの薄い土地で夏休みを迎えて、精神的な疲れが溜まっていると見受けられる姪っ子を労おうとして、いつもとは違う場所設定までもしたランチへの誘いだつたが、会話は噛み合わずにギクシャクしていた。何とか修復しようと思った彩は、挑発的な口調で訊いてきた源氏物語の話には答えないで、

「わざと一線引いてるの？」とストレートに切り出した。

「えー、なんでそう思うのですか？」と真紀はドギマギした様子で訊いてから、しばらく考えていたが、「私、何か変ですよ」と自虐気味に言葉を継いだ。

アブラゼミの鳴声を聞きつつ、姪っ子のセンチメントを察した彩は、微苦笑を湛えながらそうめんの残りを食べるようにと促した。

「もしかしたら真紀は、(零落した悲劇の姫君)対(いわくありげな独身の伯母)という幻想でも抱いたのかしら……。私だって、光源氏ほどの男になら翻弄されたいわよ」と彩は可笑しげに言って、真紀の反応を窺った。

「……、そんなことはありません。伯母さんの深読みです」と真紀は作り笑いで応えると続けて、「光源氏が相手の鼻が紅い女性につけたあだ名がベニバナだったので、お店の名前を掛け言葉にしたのかなと思っただけです」と箸を休めて言った。

「なるほどー。私、先走っちゃったわね！秘すれば花、かしら」

「私の口ぶりもリズム感が悪かったんです」

「なんで悪かったの？」

「……！」

「…？…！」

「…？…」

期待を抱いて入学した真紀は、4カ月が過ぎて、校風や学友には同調することはできたが、特に授業外での英語教師陣とのやり取りには物足りなさを感じていた。

2年生になると文系と理系にクラス分けするが、それが大学進学には有効な手段であっても、真紀の求めている課題には足かせになってもおかしくないと思っていた。

10歳の時に見た洋画が発端で、6年にも及ぶアメリカ文学への傾倒は、ある種の才能がもたらしたといっても過言ではない、かと言って、今の教育制度の仕組みで、そんな生徒の知的探求心をくすぐるのは難しい。

いつの間にかカウンターにもたれていた真紀は、彩が淹れた食後の水出し煎茶を飲みながら、次第にもどかしい胸の内を打ち明けていた。

月の花挽歌 ～12. 末摘花～

12-4

彩の勧めで、真紀は8月に入るとすぐに帰省することになった。

月山の夏スキーは7月の中旬に閉山していたので、家業の旅館もひと区切りついたこともあって、父も義母もゆったりとした気分で娘を迎えてくれた。

久しぶりに父とチェスを指すこともできたし、夫婦仲の良さもじんわりと感じ取れたり、モヤモヤはさておき、曲がりなりにも骨休めをすることができた。

その年、1984年の8月は猛暑日が続いた。

1週間ばかりのんびりした真紀は、夏休み明けに開催される高校の山東祭（文化祭）に参加する演劇部の級友と約束していた書き割り制作の手伝いがあったので、父の車で送ってもらうことになった。

1時間足らずのドライブであったが、伯母の過去を気にせざるを得なくなっていた真紀は、新潟市内でカクテルバーとして有名だったマスターの下で、当時は珍しかった女性バーテンダーとして修業していた二十歳そこそこの伯母が、妻子持ちで年の離れたマスターと恋仲になってしまったことや、名バーテンダー以外に名うてのバイカーだったマスターが米国のルート66をツーリング中に事故死したことなどを運転中の父から聞き出した。

どこか頼りない情報だつたけれど、今にも切れそうな糸を手繰り寄せた真紀は、伯母の過去と現在が繋がるイメージをどうにか思い描くことができた。

開放感が気持ちいい居間で、小一時間ほど義姉と世間話をして父は帰って行った。

その夜、7時を回った頃だった。自室で本を読んでいた真紀を呼ぶ伯母の声がした。

『バー末摘花』がオープンする時間帯だったせいで、彩の佇まいや顔ごしらは、真紀にとって見知らぬ世界だったけれど、時節柄、真夏の夜の夢の案内人を彷彿とさせた。

「紹介したい方がいるので、身繕いしてお店に来てちょうだい」と彩が抵抗感なく言う。

「お店にですか？」と真紀は驚いて訊いた。

「そうよ。来れば分かるから」と彩は事情を説明もしないで、あとは自分で決めなさいと言わんばかりに行ってしまった。

伯母の口振りから推して、顔を出さざるを得ないと思った真紀は、高校に入ってから覚えたメイクを施すと、裏口から入らずに敢えて客と同じようにバーの重厚なオーク材のドアを押した。

夜の『バー末摘花』に入るのは初めてなので気持ちに余裕はなかったが、いざ入ってしまうと妙に落ち着いている自分がいた。

月の花挽歌 ～12. 末摘花～

12-5

とてもお洒落な空間だなあと感じ入っている真紀に、間接照明で適度に照らされた9席あるカウンターの左端に座っている男のお客が振り向いた。

「こちらにいらっしゃい」とカウンター内の彩は言って、真紀が来ることを見通していたように、ごく自然に男の隣の席を勧めた。

他にお客はいなかったので、真紀は余計な気遣いをすることもなく、丁寧な挨拶をして腰掛けた。

「こちらは山形大学の先生。真紀ちゃんの話は、ざっと話しておきましたからね」

あけすけに言う彩は、アイラモルトウイスキーのボウモア17年をモルトグラスで飲んでいる隣客を、山形大学人文社会科学部のS教授で専門領域はアメリカ文学だと真紀に紹介した。

彩がノンアルコールカクテルのシャリーテンプルを作ってくれたが、その頃の真紀にしてみれば、S教授の前にあるボトルが何であるのか知る由もなく、カクテルもなおさらであったが、短兵急にS教授を引き合わせた彩の意図だけは直ぐに理解した。

「アメリカ文学に造詣が深いということですが……」と素っ気なく訊く中年男性に、真紀は教授と言われてみればそうかな程度度の第一印象しか持てなかったが、それでも彩の人間力を疑わなかったため、気持ちは意味もなく高揚していた。

「道半ばですが、大好きです」と真紀は相手の目を直視しながら返答した。そして次からの話の展開を、お預けを食う犬のような面持ちで待っていた。

見事な梁組にセッティングされたスピーカーからジョージ・ガーシュインのピアノ曲が小さな音で流れていた。

真紀の本気度が伝わったのか、教授はチェイサーを三口飲むと、おもむろに、「今まで読んだ中で好きな作品は？」と訊いてきた。

「『キャッチャー・イン・ザ・ライ』です」と真紀は即座に答えた。

頷いたS教授は、彩に納得顔を見せると、シングルモルトウイスキーを愛おしむように口に含んだ。

「当然、フィッツジェラルドやヘミングウェイも何作か読んでいるだろうから、サリンジャーを一番に選んだのは、いいセンスをしていると思いますよ。で、レイモンド・チャンドラーは読みました？」とS教授は人柄からくるのだろう、真紀と同じ目線に立って言う。くれる。

「いいえ。まだそこまでの余裕は……」

「手始めに『かわいい女』が良いかな。ミステリー作品の清水俊二氏と文学作品の野崎孝氏の翻訳を比べてみるのも一興です」とS教授は上機嫌で言った。

S教授と出会ったことが、真紀の人生の大きな転換点となった。その一つに慶応義塾大学文学部英米文学専攻を選択したことが挙げられる。

S教授は真紀に山形大学や東北大学を勧めなかった。